

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

麻雀碰槓牌<マーチャン  
ポンガンパイ>ーマカオのカジノ麻雀一

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2014-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青野, 滋, AONO, Shigeru メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/26">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/26</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



〔研究ノート〕

## 麻雀碰槓牌 〈マーチャン ポンガンパイ〉

マカオのカジノ麻雀

青 野 滋

### はじめに

2011年、筆者は香港を訪れて、香港在住の中国人が各家庭や麻雀荘などでプレイしている香港独自の麻雀ルールの取材と調査を行い、詳細を拙著「香港麻雀〈ホンコンマーチャン〉」<sup>1)</sup>にまとめた。

その取材時に、香港の麻雀愛好家からこんな話を聞いた。

「香港とマカオ地域の麻雀にはふたつのルールがあります。ひとつは今、お話ししている『香港麻雀』。もうひとつは『碰槓牌』〈ポンガンパイ〉と呼ばれるルールです。碰槓牌には手役や点数計算が一切ないのでとても簡単です。ゆえに、初めての人にもルールの説明がしやすく、すぐに打つことができます」

碰槓牌の要点は以下の四項目。

- ◎「ポン」「カン」はできるが「チー」はできない。
- ◎「手役」はなにもなく、どんなアガリ形でも収支は均一。
- ◎出アガリは一人から賭け金が貰えるだけだが、ツモアガリは三人から貰える。つまりツモると三倍の収入になる。
- ◎アガリ以外にカンのときも収入がある。

この四点が解れば、あとはアガリとカンのときに授受されるレートを決めるだけで、すぐにプレイできるというのである。

これほどシンプルな麻雀のルールは初耳であった。それだけに、研究テーマとしてはインパクトが薄かったが、とりあえずメモには留めておいた。

香港麻雀の取材を終えた筆者は、そのあとマカオを訪れた。すると、なんと、外壁に「麻雀コーナーあり」と書かれた広告を掲げているカジノを発見したのであった。

マカオでは三、四年に一度、「ワールドシリーズ・オブ・マーじゃん」(WSOM)という大規模な麻雀大会が開催される。これに関しては拙著「マーじゃんの賞金トーナメントのルールと運営手法 マカオのWSOMを参考として」<sup>2)</sup>に詳しく記した。

しかし「ワールドシリーズ・オブ・マーじゃん」は、あくまでもスポット的なイベントである。定期的に行われる大会ではない。

ところが、そのカジノの広告には、麻雀が常設種目だと記してあった。筆者は麻雀があるカジノの存在などまったく知らなかったのも、たいへん驚いて、すぐさま調査をすることにした。

すると、そのカジノでプレイされていた麻雀は噂に聞いた碰槓牌だったのである。筆者はなるほどと思った。カジノの種目として一番大切なことは、多くの客が簡単にプレイできることであろう。競技性などはまったく必要はない。日本麻雀のような複雑なルールでは、初級者や、あるいは面識がない者同士をすぐにプレイさせることはかなり難しい。

「ワールドシリーズ・オブ・マーじゃん」においては、手役や得点計算などの競技細則が記された小冊子が出場者に配られる。つまり、それを読むだけでルールやシステムが理解できるレベルの者が参加する大会だということである。

半年以上も前から開催を告知し、高額なエントリー料と賞金が設けられている大会ならば、それでも構わないだろう。出場者のほとんど全員が、その大会に参加することを目的としてカジノを訪れる者たちだからだ。

けれども、麻雀だけが目的という訳ではなく、いろいろな遊びをしてみたい客が麻雀コーナーに立ち寄ったときに「ちょっとやってみようか」という気にさせるには、簡単に始められるルールでなくてはならない。その点で碰槓牌はカジノにおける麻雀として相応しいものであるのだろう。

## 1. 基本ルール

2011年の機に、筆者が初めて麻雀に遭遇したカジノはホリディインホテルの中にある「カジノ・ダイヤモンド（鑽石娛樂場）」であった。そしてマカオ政府が公認しているカジノは35軒<sup>3)</sup>あるが、そのほとんどを調べた結果、筆者が麻雀種目の存在を確認したカジノは五軒だった。「ダイヤモンド」の他に「カジノ・リスボア（葡京娛樂場）」「カジノ・ゴールドドラゴン（金龍娛樂場）」「カジノ・シティオブドリームズ（新濠天地娛樂場）」「カジノ・レ'ロイヤルアーク（凱旋門娛樂場）」である。

「レ'ロイヤルアーク」は麻雀コーナーを独立させて別館とし「レ'アーク・マーチャンホール（凱旋麻雀館）」と銘打って営業している。雰囲気は日本のフリー雀荘と似かよっていた。

ルールは五軒共に同じものだ。これは、客を共有する地域のカジノ群としては当然のことであろう。他の種目もほとんどがそのようになっているはずである。

手役や点数計算がないルールとはいえ、カジノの正式種目ともなれば、さすがに冒頭に記した四箇条ではすまない。プレイの基本となるルールは少ないが、賭け金の収支に関するものや、ドラブル防止のためのものなどを合わせると、そこそこの項目数にはなる。しかし、ある程度麻雀を打てる者にとっては、そんなに難しくはない。

以下、①～③⑧が条文の和訳である。各項目の[ ]内に筆者の補足、解説を加える。

①アガリの形に関らず、どんなアガリでも貰える金は均一。

[ オヤと子の差もない。]

②チートイツはなし。アガリの形として認めない。国士無双は可。国士無双の場合だけはアンカンでもチャンカンできる。

[ もちろん、国士無双でも貰える金は他のアガリと同額である。]

③ポン、カン是可以するがチーはできない。

④カンをしたら、その時点で即金が貰える。

以後、その局で他家がアガったり流局したりしても、カンの金は返却しない。

[即金と言ってもカジノチップのやり取りだが、チップが無くなった場合はもちろん現金払いも可能。]

⑤振り込みのときは振った者だけが金を払う。ツモアガリのときは三人が金を払う。

⑥二家アガリ、三家アガリあり。

⑦アンカン 自分の手番ならいつでもできる。その時点で三人から即金が貰える。

[即金を貰った後でリンシャン牌をツモる。その牌でアガったら普通のツモアガリ。]

⑧大ミンカン<sup>4)</sup>のときはカンさせた者だけが即金を払う。

⑨大ミンカンのときのリンシャン牌で、さらに続けてカンならば三人が即金を払う。

⑩大ミンカンのときのリンシャン牌でツモアガりをしたら、三人が金を払う。「馬」(後述)もあり。

⑪小ミンカン<sup>5)</sup>はツモってきた牌で加カンしたときのみ即金が貰える。

[手の内から出した牌での加カンもできるが、そのときは即金収入は無いということである。]

⑫チャンカンはツモアガリ収入の扱いで、チャンカンをされた者が三人分の金を一人で払う。ただし「馬」はなし。

[国土無双のアガリのアンカンチャンカンも同様。また、チャンカンでの二家アガリ、三家アガリでは三人分の金をそれぞれに払う。]

⑬ハイテイ牌もカンできる。

[カンの即金を貰って流局となる。]

## 麻雀碰槓牌〈マーチャン ポンガンパイ〉

⑭前局でアガった者が次局の東家。二家アガリ、三家アガリの次局は振った者が東家。

なお、カジノルールの条文には挙げられていないが、中華文化圏の麻雀の常識として以下のルールがある。

☆王牌なし。山は一枚も残さずにすべてツモる。

☆捨て牌は各自バラバラに河に捨てる。日本麻雀のように、自分の前に整然と並べる義務はない。

ただし、中華文化圏の他の麻雀では必ず使用される花牌は、碰槓牌ルールでは使わない。花牌はアガリ点に付加価値をつける要素なので、すべてのアガリ形が均一の収入となる碰槓牌では使用する意味がないからだと思われる。

## 2. 「馬」〈マー〉「中馬」〈チュンマー〉

「馬」とは、日本麻雀の「裏ドラ」や「アリス」<sup>6)</sup>などと同様に、アガってから特定の牌をめくって、的中すれば収入が増えるボーナスオプションである。これが的中するかどうか、碰槓牌で勝つための大きな要素となる。

⑮ツモアガりをしたら「馬」というボーナス牌を見ることができる。

[ 出アガリのときは「馬」はなし。 ]

⑯「馬」はツモアガリ牌の次の山の牌。

⑰東家、南家、西家、北家、それぞれ別に当りの「馬」があり、的中すれば三家の支払う金は二倍になる。「馬」が的中した状態を「中馬」と言う。

⑱東家の「中馬」は(東)・(一万)(一索)(一筒)・(五万)(五索)(五筒)・(九

万)(九索)(九筒)。

南家の「中馬」は(南)・(中)(発)(白)・(二万)(二索)(二筒)・(六万)(六索)(六筒)。

西家の「中馬」は(西)・(中)(発)(白)・(三万)(三索)(三筒)・(七万)(七索)(七筒)。

北家の「中馬」は(北)・(中)(発)(白)・(四万)(四索)(四筒)・(八万)(八索)(八筒)。

[各家共に10種類の「中馬」がある。麻雀牌は全部で34種類あるから、「馬」をめぐって「中馬」となる確率は、

$$10 \div 34 \doteq 0.294$$

三割弱である。]



写真①

[写真①は「シティオブドリームズ」の麻雀コーナーで使われているプラスチック製の補助具<sup>7)</sup>である。各家の「中馬」早見表が記入されている。縦2cm・横44cm・厚さ6mm。]

⑱ハイテイ牌でのツモアガりは必ず「中馬」とする。

[すべての牌をツモってしまったので、めくるべき牌が残っていないから。]

⑳ツモアガりのとき、必ず手牌のすべてを公開してから「馬」をめくる。

㉑ツモアガりのとき、「馬」牌を他家が触ったりして乱せば、カジノのスタッフが山をシャッフルして整理しなおしてから、改めて「馬」をめくる。

### 3. トラブル防止ルール

⑳と㉑は、「馬」に付随した「トラブル防止」のためのルールと言える。そういう項目は他にもたくさんある。

㉒出アガリを見送ったら、次の自分の手番を過ぎるまでは出アガリできない。

[日本麻雀の同巡内フリテンルールと同様である。捨て牌をバラ切りするのにフリテンの概念があるのは不思議な気がする。ただし、同順内以前の捨て牌に対するフリテンはない。]

㉓フリテン違反が起こったら、その時点で流局とする。

[チョンボではない。この点は妙にやさしい。]

㉔出アガリを見送った同巡でも、チャンカンのアガリはできる。

㉕出アガリを見送った直後のツモのツモアガリはできる。

㉖先ツモはしないこと。山の牌に一度触れたら、そのときはボン、カン、アガリはできない。

㉗ポンを取り消したら、その局はその後ボン、カン、アガリはできない。ただし、カジノのスタッフが手牌を判定して、ポン材がなければ免責となる。

[「ポンを取り消す者の手牌をスタッフがジャッジして、その中にトイツが一組もない場合だけは免責で、その後にボンもカンもアガリもできる」ということ。このケースは「ポンを取り消した」のではなく「そもそもポンができない」手牌なのだからオーケーということであろう。]

㉘フーロするときは正しく晒すこと。間違っただけの牌を拾ったり、牌を拾い忘れてしまった場合は多牌・少牌として扱う。ただし、自分の次のツモ番までは修正できる。

②⑨カンの即金をやり取りした後に、多牌・少牌が発見された場合でもカンの即金は返却しない。ただし、発見以後はポン、カン、アガリはできない。

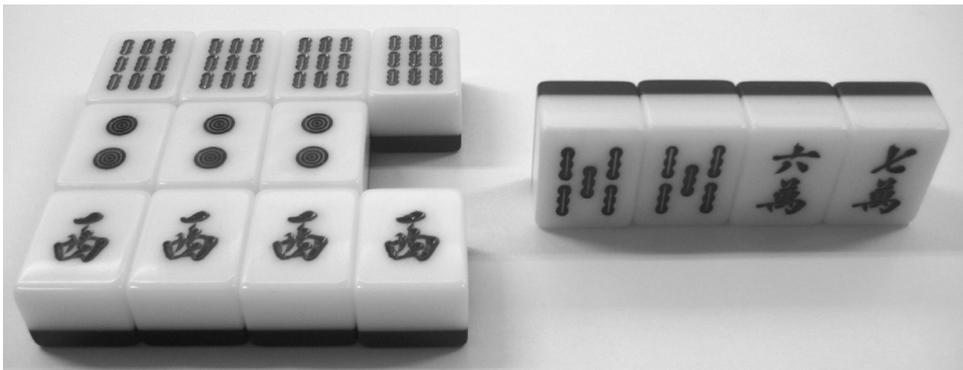
③⑩アガリ形が正しくない場合はチョンボで、ツモアガリのときの金額、つまり三倍分を三人にそれぞれ支払わなくてはならない。所持金が足りない場合は、あるだけを三人で均分する。不足者はカジノから強制退場。

[カジノの麻雀コーナーの近くにはキャッシュディスペンサーが設置されていたり、「押」〈ヤー〉と呼ばれる「質屋」が営業していたりする。]

③⑪金のおつり、やり取りは慎重にすること。

③⑫伏せ牌は禁止。

[卓の周辺にはスタッフが常駐しており、手牌の一部、あるいは全部を伏せている者はスタッフに注意される。]



写真⑧

[メンゼンであるか否かは、やり取りする金額にまったく影響がないので、アンカンとミンカンのフーロに区別はない。写真⑧のように、すべてを表向けて手牌の左側にセットする。また、捨て牌に対するフリテンがないので、どこから鳴いたかを明示する必要もない。]

③⑬アガリがないうちは、ハイテイ牌までツモと打牌をしなくてはならない。

## 麻雀碰槓牌〈マーチャン ポンガンパイ〉

[カン材がなく、テンパイもしていない者はハイテイ牌をツモってもなにもメリットはない。打牌で振り込む可能性のデメリットがあるだけである。ゆえに、わざとハイテイ牌をツモらずに「流れだ」とか言いながら場を崩すアンフェアな行為もあり得る。それを防止するために、この条文が備えられたのであろう。日本でも昭和の頃のブウ麻雀などで、このような行為が見受けられた。]

③4 お客様が足りない場合は、カジノのスタッフが補充で入ってプレイする。

[当然、スタッフとも金のやり取りをする。スタッフの多くはハイスキルで麻雀マナーも良い。]

③5 お客様はスタッフとの席替え要求ができる。

③6 席替え時でも、前局にアガった者が次局の東家となる。

③7 すべてのルールを表し尽くしてはいないので、トラブルが起きた場合はスタッフが裁定する。

日本人のモラルからすれば、はたしてこれはルールに記すべきことなのかと思われるような項目もある。しかし、中国人の感覚ではこのように細々と列挙しておく必要があるのかも知れない。

## 4. 「レート」と「コミッション」

マカオのカジノの麻雀コーナーでは、卓ごとにレートが明記されている。バカラやルーレット、ブラックジャックなど、他の種目と同様である。

単位はHK\$（香港ドル）<sup>8)</sup>で、〈100/200〉・〈200/400〉・〈500/1000〉などの表示があった。

〈 $n/2n$ 〉のレートとは以下の通りである。

(ア)出アガリは振り込んだ者が $2n$ を支払う。つまり、アガった者の収入は $2n$ である。

(イ)ツモアガリは三人が $2n$ ずつ支払う。アガった者の収入は $6n$ となる。

(ウ)ツモアガリで「馬」が的中して「中馬」になると、三人が $4n$ ずつ支払う。アガった者の収入は $12n$ となる。

(エ)大ミンカンはカンをさせた者が $3n$ を支払う。カンをした者の収入は $3n$ 。

(オ)アンカンは三人が $2n$ ずつ支払う。カンをした者の収入は $6n$ となる。

(カ)小ミンカンは三人が $n$ ずつ支払う。カンをした者の収入は $3n$ 。

つまり、「ミンカンは大でも小でも収入は同じ」「出アガリよりもミンカンのほうが収入が多い」「アンカンはミンカンの二倍の収入」「『中馬』は出アガリの六倍の収入」ということである。

収支は現金でもやり取りできるが、卓に入るときに $10n$ ほどの現金をチップに替えておくことをスタッフに勧められる。

「リスボア」「ダイヤモンド」「ゴールドドラゴン」「レ' アーク」の四軒では、〈 $100/200$ 〉〈 $200/400$ 〉〈 $300/600$ 〉〈 $500/1,000$ 〉〈 $1,000/2,000$ 〉〈 $2,000/4,000$ 〉〈 $3,000/6,000$ 〉〈 $5,000/10,000$ 〉の八通りのレートがあった。

「シティオブドリームズ」では、さらにその上の〈 $10,000/20,000$ 〉と〈 $20,000/40,000$ 〉という卓も用意されていた。

〈 $20,000/40,000$ 〉のレートでツモアガリをして「中馬」的中なら $240,000$ HK\$。日本円に換算して、おおよそ300万円のアガリとなる。

「シティオブドリームズ」のスタッフの談話によると、〈 $20,000/40,000$ 〉の卓はたまに立つ程度だそうである。〈 $10,000/20,000$ 〉ならば毎日一、二卓は立つとのこと。

一般的なレートである〈 $200/400$ 〉〈 $300/600$ 〉あたりなら、どのカジノでも常時数卓が稼働していた。

## 麻雀碰槓牌〈マーチャン ポンガンパイ〉

一番安い〈100/200〉の卓は、どこもほとんど立っていなかった。初めての客が試しに打つレートらしく、観光客の多い週末には少し立つようだ。

筆者は「シティオブドリームズ」で〈10,000/20,000〉の卓が立っているのを見かけたが、その卓の回りは衝立てで囲われており、中は覗くことができなかった。

コミッション徴収の規定も五軒とも同様であった。

(キ)場代は収入があった者のみが支払う。金額は収入額の5パーセント。

(ク)収入が発生したときに、即金で場代を徴収する。

たとえば〈100/200〉の卓でアンカンをすれば、三人から200HK\$ずつチップを貰えるが、すぐさまスタッフがやってきて、

$$200 \times 3 \times 0.05 = 30$$

合計収入600HK\$の5%にあたる30HK\$を、アンカンした者から徴収する。

〈20,000/40,000〉の卓で、ツモアガって「中馬」になれば、

$$80,000 \times 3 \times 0.05 = 12,000$$

12,000HK\$を差し引いていく訳である。

## 5. 「過牌」〈クオパイ〉

「過牌」とは、一局の開始時、サイコロを振る前に、山の牌の並びを人為的に変えることができるというオプションルールである。

③⑧支払いをした者は、次局に一回だけ「過牌」を申し立て、実行することができる。

日本麻雀には同種のルールは見当たらない。強いてたとえるならば、トランプの「カット」や花札の「のぞむ」行為と似ていると言えよう。

具体的には、一局が始まる前に、東家すなわち前局にアガった者がサイコロを振る前に、前局支払いがあった誰かが「過牌」を申し立てたら実行される。全員が自分の山の右端の牌を、指定された枚数だけ下家のほうに移動させる。そして、上家から回ってきた同じ枚数の牌を自分の山の左端にくっつけて山を組み直すのである。(写真©)



写真©

東家がサイコロを振る前でなければ宣言できない。また交換は必ず左回りにしなければならない。

枚数は一枚から六枚ぐらいまで。片手で握める範囲なら何枚でも良い。宣言者が同時に交換枚数も申告する。

通常は偶数枚で、上山と下山がセットで「過牌」されることが多い。

「1」と申告すれば上下一枚ずつで合計二枚。「2」なら同様に四枚。「3」なら六枚という具合だ。

変則的に「上山だけ1」とか「上山だけ3」とかいうやり方も可能だ。

中国人はこの「過牌」が好きで、誰かが続けてアガったりすれば、毎局のように他の誰かが宣言する。

筆者が体験取材をした時に好調となり、三局連続でツモアガリをして、三局とも「中馬」が的中したことがあったが、そのときは「上を1、下を2」とか「下だけ3」とか、ものすごく面倒な「過牌」が行われた。もちろん、片手では握めなかった。

この「過牌」、筆者はマカオのカジノ麻雀で初めて体験したのだが、このルールを連想させる文章には心当たりがあった。

阿佐田哲也氏が記した小説「麻雀放浪記・番外編」から引用する。

「昔、地下道に寝てたおっさんから、こんな話をきいたことがある」

「話などよか、サイを振らんね」

「まア聞けよ」

とドサ健はしゃべり止めなかった。

その浮浪者が元主計将校で中支に居たときのことだ。中国人の富豪の家で麻雀をやっている。それをよく見ていたんだそう。

ドサ健を麻雀打ちと知って、ある日こんなことをいった。

「お前さん、ナルサン・パアピイをやってるかね」

「そりゃなんだ」

「やってないのか。それじゃ本当の博打じゃないな」と元主計将校はいった。「支那でも本場じゃそいつア常識なんだ。麻雀はイカサマが多かるう。イカサマをやりづらくするために下駄牌（現在の牌よりもひとまわり大きくて薄い）を使ってるが、それでも皆やる。今度の山は危ないな、やられている臭いな、と思ったら、定め点棒を場に出して、ナルサン！ とか、パアピイ！ とか叫ぶんだ」

ナルサン とかけ声がかかったら、配牌をとるとき、四枚ずつでなく、（皆が）六枚ずつ二度持ってくる。

パアピイ といったら、やはり配牌時に親が上山だけ四枚をひんめくってくる。南家がその下山四枚、西家は次の上山四枚、北家がその下山 。

要するに、臭いとみたら、権利の点棒を払って変則的なとりかたをするわけだ。

「ナルサンというのはなんて意味だったかな。パアピイはたしか、皮を剥ぐって書くんだと思ったな」

---

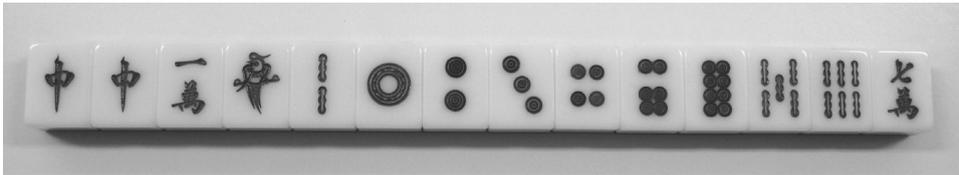
この小説の舞台となった1950年頃の日本麻雀は、もちろん手積みで行っていたが、現在のマカオのカジノ麻雀では全自動卓が使用されている。したがって「過牌」には積み込み防止の意味はないはずだが、好調な相手に対する「アヤつけ」の意図で申告するのであろう。

## 6 . プレイ感想

マカオのカジノで碰槓牌をプレイした筆者の感想は、一見単純そうな麻雀のようではあるが、その実、運よりもスキルのほうがはるかに重要な麻雀だと思われた。現在の日本麻雀よりもスキルの差が勝敗に出やすいだろう。

「馬」が当たって「中馬」となるかどうかは運以外の何物でもないが、まずはツモアガりをしないことには、その運を開く権利が得られない。

手役も縛りもないシンプルな麻雀でツモアがる。この回数を他者より多くするためには、牌理手順の正確さがとても大切だ。



写真①

写真①は14枚の手牌で、ここから打牌をするところ。孤立牌の（一万）と（七万）のどちらを打つか。

手役というチャートがある麻雀なら、他色のシュンツ（一筒・二筒・三筒）とターツ（一索・二索）に着目して（一万）を残し、（七万）を打つ手が良いのかも知れない。

この後、ツモ（三万）などとくれば、写真②のような変化で（1・2・3）の三色が狙えるからだ。手役を意識して、狭くても高くなるように打つ訳である。



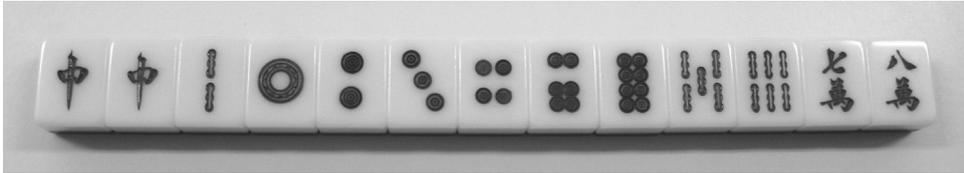
写真②

だが、手役に意味がない碰槓牌であれば、写真①からは手広さのみを考慮して（一万）を打つ手筋のほうが勝るだろう。次にツモ（八万）などとくれば、受け入れが狭い

麻雀碰槓牌〈マーチャン ポンガンパイ〉

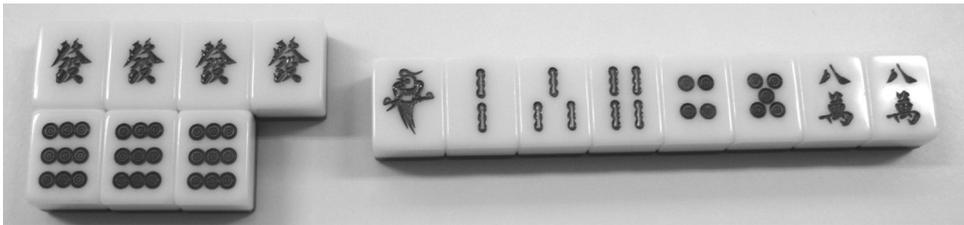
(一索・二索)のターツを処理して、写真㊦のような、受け入れが広い手牌に変化するかも知れないからだ。チーがなく、出アガリよりもツモアガリがはるかに優遇される麻雀ならば当然の手筋である。

この例は極めて単純なケースであるが、このような単純なことをコツコツと重ねて、ツモアガリの確率を高めていかななくてはならない。



写真㊦

また、アガリに向かう攻めの手順以外に、受けのための緻密な打牌も必要だ。振り込みの失点が大きくない麻雀だから、過敏にベタオリする局面は少ないが、放銃をしないためだけではなく、相手の手牌をなるべく進行させないように心がける受けの感覚も大切である。



写真㊧

写真㊧はテンパイの手牌で、(一索)か(四索)のどちらを打つかという状態。

ここで相手方もテンパイと読むか、まだイーシャンテン以下と見立てるかで打牌は変わってくる。

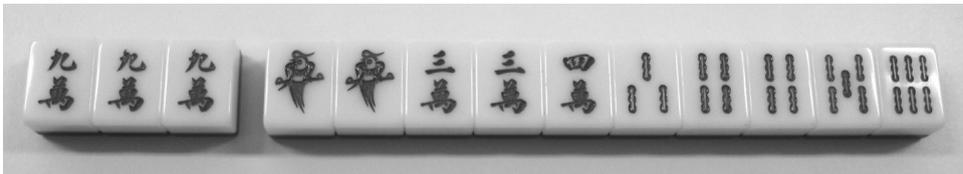
相手もテンパイならば、(一索)よりも内側の(四索)のほうが危ないというのが、どんな麻雀にも通用する牌理である。すなわち(一索)を打つほうが良いだろう。

しかし、相手のテンパイは未だと判断するのなら(四索)のほうを打つ手もある。相手がポンで手を進めることが少ないようにする手筋である。



写真㊦

相手の手牌が写真㊦のように、（一索）も（四索）もポン材で、どちらでもポンテンがかかる形というのならば致し方ない。



写真㊧

けれども、写真㊧のような形で（一索）ならポンテンが取れるが、（四索）はポンしないか、ポンしてもテンパイではないケースもよくある。

「端牌はシュンツを作りにくい。シュンツを作りにくい部分はコウツになりやすい」

これも基本牌理のひとつだが、この感覚を受けに使って相手の手牌をなるべく進めない打ち方も成り立つのである。

このあたりの感覚は、メンゼンを崩すと安手になったり、リーチがやたらと有利な手段であったり、安手を何回もアガるよりは高い手を一回アガるほうが勝ちに直結しやすい麻雀、つまり現在の日本麻雀しか打ったことがない打ち手にとっては、最初は難しく感じられるかも知れない。

さらに、カンが即金というルールも打ち筋に影響を与える。独立したアankoを持っているところに他家が四枚めを打ってきたら、大ミンカンをしなない者はいない。そして前述の通り、振り込みよりも大ミンカンをされたときのほうが取られる金額は大きい。なおかつ、カンでは局が終了しないので、即金を取られた上に、アガリの金まで持つていかれる可能性もある。

ゆえに、アガリが期待できない手牌ならば、初牌を打って相手に大ミンカンをされるよりは、振り込んだほうがまだましということになる。特に、終盤での字牌の初牌は恐

いだろう。不用意には打てない。

まとめると、攻めるときも受けるときも、手役がある麻雀よりも緻密さが要求されるということだ。また、相手の待ちや進行具合を手役狙いの観点から読むことができないから、手順で読むしかない。そのためには、誰が、どの牌を、どういう順番で打ってきたのか、それがツモ切りなのか手出しなのかまで、しっかりと見ることが重要だ。それなのに各自の捨て牌はバラバラである。さらに、相手の様子をうかがうのに気を取られて、自らのポン材やカン材にすぐさま反応できなかつたりすれば致命傷になりかねない。

慣れるまでは大いに疲れる麻雀だと言えるだろう。

## おわりに

「シティオブドリームズ」のスタッフによると、マカオのカジノで本格的に麻雀コーナーを開設したのは「シティオブドリームズ」が最初で、2009年のことだそうである。

バカラやルーレット、ブラックジャックなどの「客 VS ハウス」という形態とは異なり、原則として「客 VS 客」の種目であるから、ハウスはコミッションを取るばかりで一時的にも絶対に損をしない。また、設備投資の面でも、麻雀の全自動卓の価格はスロットマシンなどよりもはるかに安価だそうである。

今後、麻雀コーナーを開くカジノは増えそうな見込みであるらしい。

筆者が取材時に、麻雀コーナーで打っている日本人を見かけたのは一人だけであったが、「ダイヤモンド」のスタッフは、観光シーズンには日本人客も結構打ちにやってくると言っていた。そして日本人は皆強い、とも。

異国の地で、日本のフリー雀荘よりも激しく金が動く麻雀に一人で飛び込むのは、よほど腕に覚えがある打ち手でなければできないことだろう。

日本では長びく不況のせいもあり、フリー雀荘の低レート化が著しい。また、低レートではあっても賭け麻雀は違法行為である。今後、日本の手練れ雀士がマカオのカジノ麻雀に押し寄せることがあるかも知れない。

あるいは、日本でも近々カジノ法案が成立しそうな気配であるが、そうなり、カジノ

設立の暁には、種目のひとつとして麻雀が採用されるのであろうか。その場合、どのようなルールやシステムが採られるのか興味は尽きない。

私見ではあるが、日本のカジノで現行の日本麻雀をそのまま採用しても、プレイするのはおそらく日本人のみだと思われる。世界で日本麻雀を愛好するのは日本人だけで、中国人はもちろんのこと、欧米の麻雀愛好家のほとんどが中国式の麻雀をプレイしている。

こういう現実の中、観光で日本を訪れる外国人が、一朝一夕にはマスターできない遊びに手を出すとは思えない。

マカオのカジノで採用されている碰槓牌が、日本のカジノ麻雀の方向性をも示唆しているのではないか。

最後に拙稿を記すにあたり、取材や中文和訳等にご協力をいただいた三宅浩一氏、及び香港在住の麻雀愛好家「香港くるる」氏に多大なる感謝を申し述べて結びとする。

#### 【注】

- 1) 大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要第14号(2012年6月)
- 2) 大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要第13号(2011年6月)
- 3) 2013年11月時点。
- 4) アンコに、他家が打った四枚めを加えてするミンカン。
- 5) ポンしているコウツに、四枚めを加えてするミンカン。
- 6) 昭和後期の関東ローカルルール。「有りんす」が変化した言葉と思われる。メンゼンでアガればドラ表示牌のふたつ隣の牌をめくって(リンシャン牌と反対側)、アガリ手の中に現物があれば「アリス」。アガリ点とは別に御祝儀が貰える。「アリス」状態のうちは、なくなるまで次々とめくり続けることができる。
- 7) 物差し状の平たい棒で、各自が一本ずつ持ち、洗牌のとき、築牌後に山を前方に押し出すとき、手牌を支えるときなどに使う(カジノ麻雀では全自動卓で行うから、洗牌はしない)。日本の牌よりもはるかに大きな中国牌を扱うのに便利な道具。中華文化圏の麻雀ではよく使用される。古いものには木製や竹製がある。
- 8) 2014年1月の為替レートは、香港ドルから日本円が1HK\$⇒11円強。日本円から香港ドルが15円強⇒1HK\$。

#### 【参考文献】

阿佐田哲也「麻雀放浪記・番外編」(双葉社、1972年)